

◆◇「海技の伝承」◇◆

伝えたい船の話 捕鯨船を抑留から救った瀬口船長①

昭和20年6月、「第一太平丸」は千島^{としもい}択捉の年萌事業所で操業していた。

砲手は霧^{まりたつぷ}多布で試射中に負傷して下船した砲手と交替した瀬口群造船長砲手だった

▽年萌事業所

当時この年萌事業場で操業している捕鯨船は7隻、「エトロフ丸」「オルガ丸」「曙丸」「レックス丸」「一東郷丸」「博運丸」「一太平丸」で、各船には1日1頭の捕獲割り当てだった。

この日は^{ひとかつぶ}単冠湾沖合で長須鯨の3頭連れを発見して追尾にかかった。間もなく鯨が左舷首の近くに出て、トップ（見張り台）のボースン（甲板長）は次の発砲チャンスに標準を合わせるべく、砲台の砲手に「まだヨまだヨ」と叫んでいるのに「ドカン」！ 銃は不命中。トップのボースンが「まだまだと言っているのに」と大声で怒鳴る。すると「まだまだと言ったって、待ちきれなかったよ、射ちたかったよ」と砲手。暫くの間トップと砲台の間で話し合い。

それから大笑いしあって、その内に又発砲のチャンスが来た。今度は見事命中して長須鯨を初漁して事業場へ渡鯨した。

捕った鯨を運搬する運搬船2隻が、敵潜水艦の魚雷攻撃を受けて沈没してしまった。

これでは鯨を獲っても駄目だとなって、3班に分かれて年萌事業場を引き上げる相談が纏まり、A班が8月12日^{しこたんとう}色丹島へ向けて出航した。

すると間もなく、潜水艦が出た！ と引き返して来た。翌13日にB班が出航したが、また出たと引き返して来た。これは大変なことになったと、海陸の幹部が善後策を協議した結果、全陸上部員も7隻の捕鯨船に分乗して、全船揃って明日15日に出航する事になった。

もし、敵潜水艦が出た時は、各船がその潜水艦に向かって行って、積込んだ爆雷を投下すると言う決死の方針が打ち出された。

8月15日10時、各船は見張りを厳重にして年萌港を出発した。しかし潜水艦は出てこない。油断はならんと航海を続けているうちに、正午になったら玉音放送が流れた。

「オーイ終戦らしいぞ」と通信長の大きな慌てた声に、船内は一時騒然となった。